

～IMFの世界経済見通しについて～

ポイント

- ◆ 10月8日、IMF(国際通貨基金)は世界経済見通しを発表し、世界経済成長率を2013年+2.9%、2014年+3.6%と各々、前回の7月発表から-0.3%、-0.2%下方修正しました。先進国については、改訂はなかったものの、新興国は2013年+4.5%、2014年+5.1%と前回(7月)から-0.5%、-0.4%の下方修正となりました。
- ◆ 新興国の経済成長見通しの下方修正には、2つの理由があります。1つ目は、先進国の金利上昇や1次産品価格の下落、中国の成長鈍化が進みつつあることです。2つ目は、新興国、特に中国やインド等でみられるインフラ、労働市場、投資などの経済のボトルネックによる構造的要因です。
- ◆ しかし、新興国の成長率見通しは、2013年+4.5%、2014年+5.1%と依然高く、世界経済の成長エンジンであることには変わりはありません。先進国の財政・金融政策によるサポートと、新興国経済の回復により、世界経済の長期的、持続的な成長を期待したいところです。

◆10月8日に改訂されたIMFの世界経済見通しについては、図表①のとおりです。
2013年の世界の成長率見通しは、+2.9%と前回(7月)に比べ-0.3%下方修正されました。また、2014年の見通しは、+3.6%と-0.2%下方修正されました。下方修正の主な要因は、新興国の2013年の成長率見通しが+4.5%と-0.5%下方修正、2014年の見通しが+5.1%と-0.4%下方修正されたことによります。

◆新興国のうち、成長率見通しの下方修正の幅が大きかった国をみると、2013年は、インドが前回から-1.8%下方修正、メキシコが-1.7%の下方修正、ロシアが-1.0%の下方修正の幅と大きく、2014年には、インドが-1.1%下方修正、ブラジルが-0.7%下方修正と修正の幅が大きくなりました。

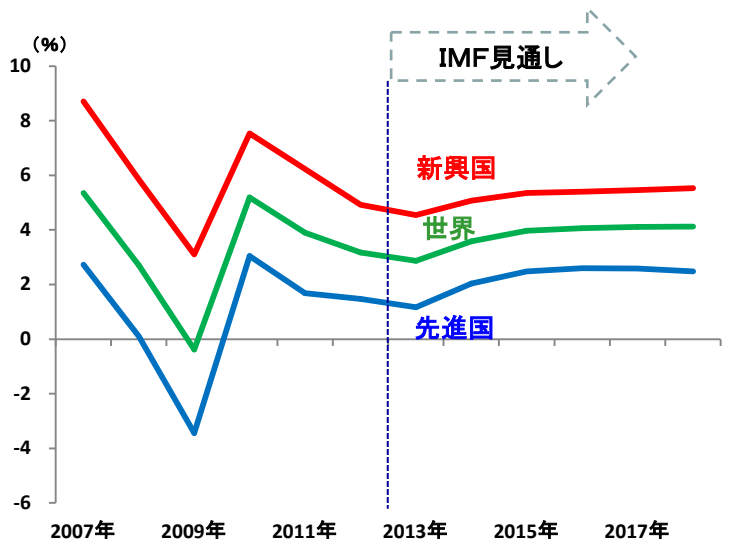
◆先進国については、潜在成長の確保と財政安定が長期的な問題であるものの、超低金利政策の継続により、経済成長を維持し、米国を中心に緩やかに回復すると予想しています。
一方、新興国は、2つの問題に直面しているとみられます。1つ目は、先進国の金利上昇や1次産品価格の下落、中国の成長鈍化が進みつつあることです。今後、米国を始め先進国は、異例の金融緩和から徐々に金融引き締めへ回帰してくるでしょう。
2つ目は、新興国、特に中国やインド等でみられるインフラ、労働市場、投資などの経済のボトルネックによる構造的要因です。高度経済成長はいつまでも続くものではなく、歴史的に見ても、経済成長が穏やかに均衡していくという「大収束」の過程は止まらないとの見方があります。

◆新興国の成長率見通しは、2013年+4.5%、2014年+5.1%と依然高く、世界経済の成長エンジンであることには変わりはありません。先進国の財政・金融政策によるサポートと、新興国経済の回復により、世界経済の長期的、持続的な成長を期待したいところです。

【図表①:IMFの世界経済見通し(実質GDP成長率)】

	2011年	2012年	2013年 予想	2014年 予想	2013年 (7月予 想時との 比較)	2014年 (7月予想 時との比 較)
世界	3.9%	3.2%	2.9%	3.6%	-0.3%	-0.2%
先進国	1.7%	1.5%	1.2%	2.0%	0.0%	0.0%
米国	1.8%	2.8%	1.6%	2.6%	-0.1%	-0.2%
ユーロ圏	1.5%	-0.6%	-0.4%	1.0%	0.1%	0.0%
日本	-0.6%	2.0%	2.0%	1.2%	-0.1%	0.1%
新興国	6.2%	4.9%	4.5%	5.1%	-0.5%	-0.4%
ロシア	4.3%	3.4%	1.5%	3.0%	-1.0%	-0.3%
中国	9.3%	7.7%	7.6%	7.3%	-0.2%	-0.4%
インド	6.3%	3.2%	3.8%	5.1%	-1.8%	-1.1%
アセアン5	4.5%	6.2%	5.0%	5.4%	-0.6%	-0.3%
ブラジル	2.7%	0.9%	2.5%	2.5%	0.0%	-0.7%
メキシコ	4.0%	3.6%	1.2%	3.0%	-1.7%	-0.2%

【図表②:実質GDP成長率の推移】



出所: 図表①、②はIMFのデータより、ニッセイアセットマネジメントが作成